

平和島の街角から大森をながめる

<1> 美原通り商店街

京浜急行の平和島駅を海側に出て第一京浜を渡って路地裏を抜けると、旧東海道に飛び出る。旧東海道が残っている区間は、平和島口交差点の南側にある平和島交番前から、大森町駅の北側にある大森警察署前交差点までの約1Km。商店街があるこの道には「美原通り」と名が付いている。この町の存在を知ったのは1995年頃だっただろうか。「美原通り」という呼称が気になっていたが、特に調べて見ようとも思わなかった。(地図はこちらから <https://yahoo.jp/Xenrf6>)
時は流れて2025年酷暑の夏、何気なく地図を眺めていたら、棚に上げておいた疑問が突然落ちてきた。なぜ「美原通り」なんだろう。

調べて見たらすぐにわかり、呆気ないほどに簡単に終わってしまったのだが・・・。

江戸時代の「通俗荏原風土記」によると、大森村の海岸沿いの街道に、「北原」「中原」「南原」という字地名があり、これらを俗称として「三原」と呼んでいた。

元は「三原通り」だったが、瑞祥地名として「美原通り」に変わったものと思われる。

三原地区は、大森海岸駅と平和島口交差点の間にある磐井神社の神領になっていた。

磐井神社は、貞観元年(895年)武蔵国八幡社の総社に定められ、鈴ヶ森八幡宮とも呼ばれていた。祭神は応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・姫大神(ひめおおかみ*)・大己貴命(おおあなむちのみこと*)。余談だが、京急の大森海岸駅は開通当初の駅名は「八幡(やはた)」だった。

*磐井神社の地図 <https://yahoo.jp/WDp236>

*註: 姫大神は主祭神の妻や娘を意味するもので、大己貴命は大國主神の一人と言われている。

<2> 平和島

平和島という島は、東京都が事業主体者となって作った117万㎡の人口島で、1967年に竣工した。1939年(昭和14年)に埋立を開始したが、第二次世界大戦により一時中止となり、我が国が捕えた連合国側の捕虜を収容する「東京捕虜収容所」として使われた。終戦により施設は廃止され、極東軍事裁判の戦犯の一時収容所として使われ、東條英機らが収容された。

そのような経緯から、施設が開放された後、「平和への祈願」をこめて「平和島」と命名され、東京都が作った物流大規模拠点として「東京流通センター(TRC)」が生まれた。

島の北部に競艇場と温泉施設が設置されて、遊興施設としてもはやされた時期もあった。

平和島の北側にある人口島は、平和島より一足先に出来たが、「日中戦争の勝利」を願って「勝島」と名付けられた。こんな所にも戦争の痕跡が残っている。

2000年頃に、数年間流通センターで仕事をすることがあり、この辺りをぶらつく機会が出来た。

旧の陸地には東海道沿いの様々な歴史が刻まれており、埋立地(人口島)にはそれぞれの足取りがあり、新しくできた高層建築の街には不思議な空気がある。それぞれにそれぞれの面白さがあった。

平和島競艇開催日の賑わいと、終了後に酔っ払いがたむろする光景は、あまり良いものではなかった。

<3> 大森の歴史

大森村は、奈良時代から明治初期まで武蔵国に属しており、21郡(後に22郡)のひとつである荏原郡に属していた。武蔵国は、現在の埼玉県、東京都の大部分、および神奈川県川崎市と横浜市の大部分を含むエリアだった。

＊武蔵国の郡：埼玉・足立・豊島・荏原・橘樹・久良・都筑・多摩・新座・入間・高麗・比企・秩父・横見・大里・男衾・那珂・児玉・榛沢・賀美・幡羅

徳川氏入国後の天正年間（1573～1593）には六郷領花井の郷大森村と言われ、慶長、元和の頃に東大森村、西大森村、南大森村、北大森村の四ヶ村に分割したが、元禄の頃東西北の三ヶ村に再編された。

「新編武蔵風土記稿」によると、六郷領内の家屋総数は3700軒余で、最大の馬込村は307軒、最小の浜竹村は17軒となっている。

地域的には大森地区に最も多く家屋の集中があり（東大森村300軒余・西大森村200軒余・北大森村180軒余）、平地、水田が多く、海浜では魚類と海苔が主たる産物だった。

慶長9年（1605年）大久保長安幕命により、六十間を一町、三十六町を一里と定め、東海、東山、北陸三道に、一里塚を築くことになり、道路の再整備が進められた。

鈴ヶ森磐井神社前から大森町を通過して、蒲田の梅屋敷に達する街道に、品川、川崎間の中宿として、大森が珍重されるようになり、人足や駕籠かき等の替え場所となり、掛茶屋も軒を連ねるようになった。その後、大森は幕府直轄の地となり、東、西、北の三村に分かれ、東海道の交通が煩雑になるにつれ、中宿大森村の人家が街道沿いに増加し、掛茶屋、旅人の荷物運搬人足の建場などばかりでなく、海路による交通・荷物運搬等の利便も含めて急速に発展した。

嘉永6年（1854年）に黒船が浦賀に来て通商を迫られたことから幕府は沿岸警備の必要に迫られ、湾岸の防備として大森に台場を築き、加賀前田侯に警備にあたらせた。

台場があったのは、「大森ふるさとの浜辺公園」の西側で、現在はアコーディアガーデンゴルフ場になっている。（大森台場跡 <https://yahoo.jp/vTRnov>）

また、警備の拠点（本陣）として、大森村中原の「和中散」という薬商の屋敷が使われた。

「和中散」は、食あたり、暑気あたり等に効く、道中常備薬として、旅人に珍重されていた。

元禄から正徳にかけて（1688～1716年）、大森村中原、谷戸、南原に三店を開業していたが、南原にあった店が、のちに北蒲田村の忠左衛門に譲られ、文正年間（1818～1830年）の始め、忠左衛門の子の久三郎の代に再移転した。移転先の敷地内に庭園を造り、梅の名木を集めて茶屋を開設し、人々が集る場所になり、現在の梅屋敷の興りになった昭和50年（1975年）に。梅屋敷公園内にある「和中散売薬所跡」が大田区指定史跡となった。（梅屋敷公園 <https://yahoo.jp/U7y5ir>）

荏原郡の帰属については、慶応から明治にかけて一時的な混乱はあったが、明治初頭には三田・上高輪町・下高輪町・北品川宿・南品川宿を含む102ヶ町村となった。

荏原郡は、現在の行政区画で目黒・品川のほぼ全体と、大田・世田谷の大半と、港・千代田・神奈川県川崎市の一部をあわせた範囲に及んだ。

明治元年（1867年）、江戸を東京と改称し、武蔵の地に東京府が開設された。

1871年に、荏原、豊島、足立、葛飾、多摩の5郡に再編して、同時に飛び地の荏原郡世田ヶ谷村などの21ヶ村と多摩郡岡本村などの9ヶ村が東京府に移された。

明治5年（1872年）に荏原郡の西大森村・東大森村・北大森村が合併して、大森村が成立。

明治11年（1878年）に東京府は府下を区と郡に分け、麹町区・神田区・浅草区などに旧幕時代の地称を付し東京15区を設け、市街地に隣接する旧街道宿場および農村部に荏原郡・東多摩郡・南豊島郡・北豊島郡・南足立郡・南葛飾郡の六郡を置いた。

旧大森区に該当する区域は、大森、不入斗（いりやまず）、新井宿、馬込、池上、石川、雪ヶ谷、市野倉、桐ヶ谷（馬込領桐ヶ谷）、堤方、下池上、徳持、久ヶ原、道々橋（どどばし）、鶯ノ木、嶺、下沼部、上沼部の18村に編成されて、荏原郡に属した。

明治22年(1889年)に市制・町村制が施行され、東京府は府下に旧15区の区域を市域とした東京市を設けた。そして荏原郡下の18ヶ村は「大森村」、「入新井村(不入斗村と新井宿村が合併)」、「馬込村」、「池上村(池上、石川、雪ヶ谷、市野倉、桐ヶ谷、堤方、下池上、徳持、久ヶ原、道々橋の10村が合併)」、「調布村(鵜ノ木、嶺、下沼部、上沼部の四村が合併)」の五村に編成された。

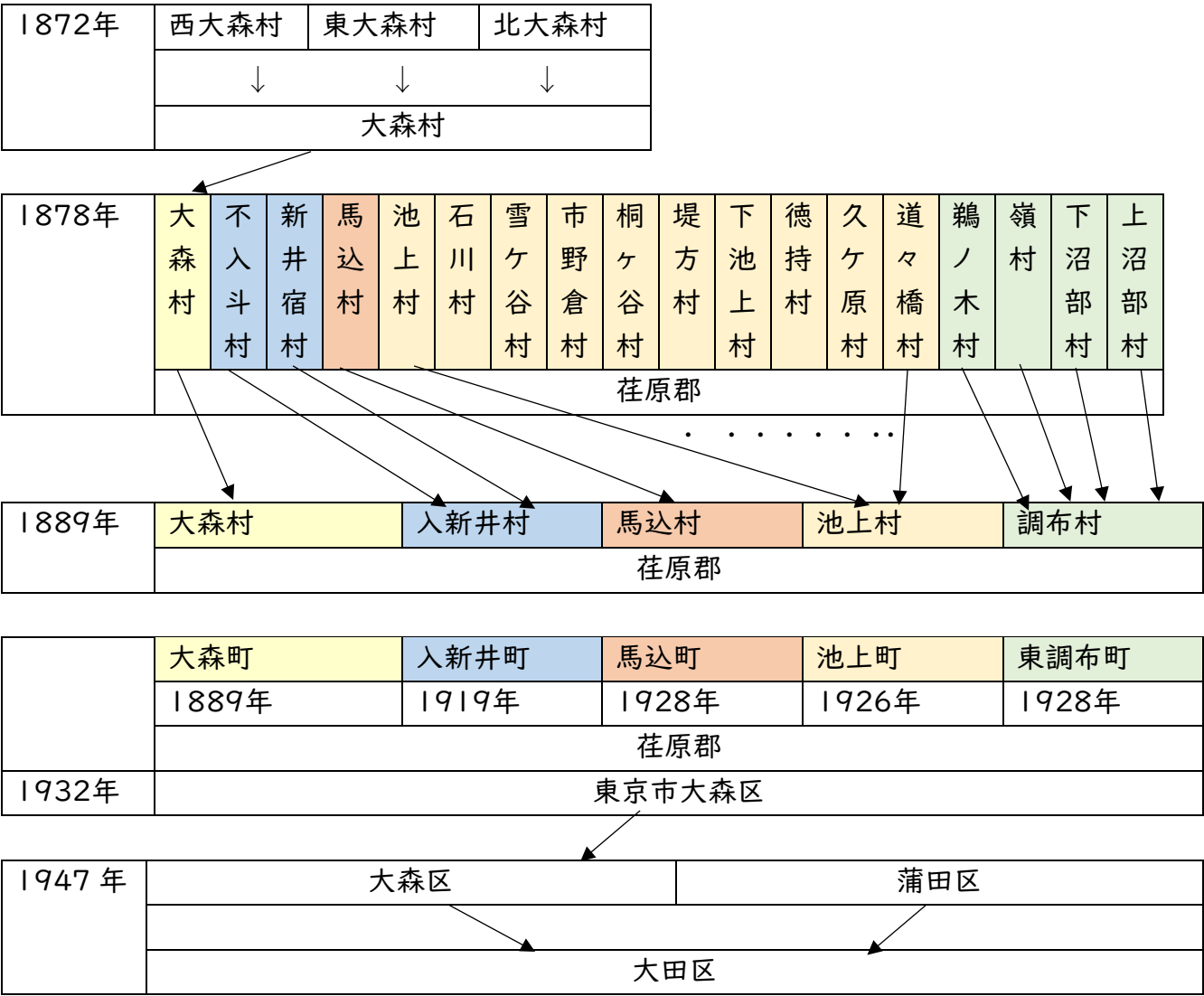
明治30年(1897年)に荏原郡大森村が町制を施行して大森町となった。これに続き、荏原郡入新井村が大正8年(1919年)に入新井町に、池上村が大正15年(1926年)に池上町に、馬込村と調布村が昭和3年(1928年)に馬込町と東調布町になった。

昭和7年(1932年)に大森・入新井・池上・馬込・東調布の5町域をもって大森区が誕生し、東京市に編入された。

1947年(昭和22年)に大森区が蒲田区を編入・改称し一文字ずつ取って「大田区」が成立。

以上

●資料-1:大森村の足取り



*参考にした資料:「大森町界隈あれこれ」(インターネット上で参照)